増田院長の 今日もニコニコ VOL.23

院長
増田 剛

今回は 2015 年に発刊した創刊号でも取り上げた関節診療のお話です。5 年前に「当院の得意な」と紹介した人工関節手術ですが、その後も常にレベルアップを継続してきました。その内容は本文をご参照頂きたいと思いますが、整形外科医師をはじめとした関係スタッフの、懸命の努力の賜物だと誇らしく感じています。

2018 年には関節治療センターが開設され、実診療は勿論、技術構築と情報発信の戦略拠点として、当院での関節診療の飛躍を創り出しています。何歳になっても日常生活の質を維持して楽しく生きていきたいというのは、多くの人々の願いであり、超高齢社会において克服しなければならない重点課題です。こうしたニーズはこれからも減るどころか益々増えることが予想されます。優秀で熱意と意欲を持ったスタッフが皆さんをお待ちしています。お気軽にお声かけ下さい。

虹の投書箱だより

投書のご紹介

医療従事者のみなさん、緊張の毎日ご苦労様です。

麻酔から覚めたその時、夜勤の担当ですと自己紹介され患者に寄り添った声かけ、かかわりかたに感激しました。

以前から医療生協活動に参加していましたが、直接患者として、スタッフが生協の基本理念を認識し身につけられている、この事実にありがとうと感じました。

今の私にできることは何かと考え、感謝の意を込めて小物の手作りを思いつき、心を弾ませ頑張って作りました。

手術後の経過はいかがでしょうか。

整形外科に入院される方は手術目的の方がほとんどであり、入院時は不安もあると思いますが、このように、入院中の私達の関わりについてお褒めの言葉をいただき大変励みになりました。

今後も医療生協の基本理念を大事にしながら、ご要望に添えるよう努めて参りたいと思います。感謝のお気持ちを伝えて下さり、ありがとうございました。

（D2 病棟看護長　浅香眞由美）

埼玉協同病院だより ふれあい 秋 No.23
〒333-0831　川口市木曽呂 1317　Tel.0570-00-4771　Fax.048-296-7182　ホームページ：http://www.kyoudou-hp.com
埼玉民医連
発行：医療生協さいたま 埼玉協同病院

埼玉協同病院だより　●私たちの医療理念●　～人権をまもり、健康なくらしに役立つ医療を、地域とともにつくります～　発行：埼玉協同病院

季刊 ふれあい 秋号

2020年 9月
No.23

〒333-0831　川口市木曽呂1317
Tel.0570-00-4771
ホームページ
http://www.kyoudou-hp.com

特集 協同病院の

関節治療の最前線

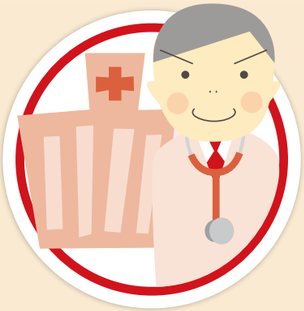
整形外科主任部長
仁平高太郎 医師

食品・食材を無料で提供する活動を行っています。

新型コロナウイルス感染症拡大による影響で、収入が減り、十分な食事を取ることができない方へ、埼玉協同病院と老人保健施設みぬまが連携して食品を提供する活動（フードパントリー）を行っています。

地域の企業などから食材の提供を受けたり、組合員さんや職員からも「お米１合持ちより運動」で700合（約100kg）を超えるお米が集まりました。

今後も、明日の食事に困っている方へ食材の無料配布を続けて行きます。フードドライブは通年実施していますのでご相談ください。食材の寄付のご協力もお願いします。



協同病院の

関節治療の最前線

埼玉協同病院の関節治療センターの、高度な人工関節手術と再生医療は、全国でも注目されています。「満足のいく足」を取り戻して人生を楽しくしたい―。関節治療センターの取り組みを二回にわけて取り上げます。

痛くない手術をめざし人生を楽しくしたい 埼玉協同病院の人工関節術

膝や股関節が痛くてつらい思いをしている方に、ぜひお勧めしたいのが埼玉協同病院・関節治療センターでの治療です。年間1000件近い手術を行う技術力、術前術後の満足度を高める取り組みについて聞きました。

仁平 高太郎
医師
整形外科
主任部長

×

桑沢 綾乃
医師
整形外科
部長

人生100年時代 自分の足で元気に歩こう

「長寿化が進み、人生100年時代といわれます。60代、70代の方も、まだまだ先は長いので、元気いっぱい歩いていたいですよね。でも、膝や股関節の痛みを我慢している方が多いんです。そのままにしておくと、悪化して動けなくなり、寝たきりの原因になってしまいます」

と話すのは、副センター長の桑沢綾乃医師です。

「膝・股関節の人工関節手術は安全性と確実性に優れ、21世紀で最も成功した手術だといわれます。実際、アメリカでは多くの人が、運動できなくなりかけた時点で手術し、すぐに治しています。ところが日本では、痛そう、怖そうという先入観が根強く、手術をためらう人が多いんですね」

しかし、状況は変わりつつあります。国内での牽引役になっているのが埼玉協同病院の関節治療センター。2018年に開設され、膝・股関節の人工関節手術と再生医療の二本柱で幅広い治療を実施。その評判は全国に口コミで広がり、多くの患者さんが外来に訪れています。

センター長は、仁平高太郎医師。コンピュータやロボットを駆使した先端医療に早くから着目し、国内トップレベルの手術体制をつくり上げた立役者です。

「患者さんの脚を良くすることが大好きで、一人ひとりを大切にする姿勢を貫くドクター。診察の際も、綾小路きみまろさんならぬ“仁平小路たかまろ”トークで笑わせて話しやすい雰囲気をつくり、患者さんの心をつかんでいます（笑）」と桑沢医師。

みんなニコニコ 明るい病棟にびっくり

そんな二人の医師を中心に、センターでは日々、多くの手術を行っています。手術後の患者さんが入院している病棟を訪ねると、「痛そう」「怖そう」という暗いイメージはありません。

笑顔でおしゃべりしたり、廊下で歩く練習をしたり。車椅子には明るい絵が描かれ、患部を冷やすタオルカバーも好きな柄を選べます。旅館で浴衣を選ぶような楽しみを、と桑沢医師が考案し、手作りしたものだそうです。

「病棟のエンターテインメントを工夫しているんです。楽しくリハビリできたほうがいいでしょう？」（仁平医師）

アニメ『となりのトトロ』の主題歌にのって廊下を歩く「おさんぽタイム」や、患者さんによるフラダンスの会も。関節治療センターのホームページでは、30人でフラダンスを踊っている動画を見ることができます。

「滑らかな脚の動きに驚かれるかもしれません。テニスもスキーもダンスもできるし、高い所で作業する大工さんや植木屋さんも普通に手術をしています。東京オリンピックの聖火ランナーにも、僕の手術した患者さんが選ばれたんですよ」（仁平医師）

正確な手術のために 入念に事前準備

なぜ、これほど満足度の高い手術が可能なのでしょうか。

「人工関節手術は、正確に行うことが最も大切。そのために、国内でも数少ない

最新設備と体制を整えています」と仁平医師。驚くのは、すべての患者さんに対し、手術の前に3Dでの立体的なデザインを設計していることです。

「人工関節手術は、骨や軟骨の悪い部分や変形した部分を取り除き、その人にぴったり合った金属製の人工関節に取り換える手術です。人工関節のサイズは1ミリ単位なので、どのサイズのものをどの深さに入れればいいか、コンピュータで立体画像を動かしながらシミュレーションするのです」（仁平医師）

人工関節を正確に設置すると、脚の長さがそろい、人工関節が長もちします。脱臼や感染などの合併症を防ぐ上でも重要です。難しい症例の場合は、3Dプリンターという機械で実物大の骨の模型まで制作。こうした術前のシミュレーションを全例に実施している病院は、全国でもわずかだそうです。

最新機器を駆使した正確でスピーディーな手術

実際の手術では、事前にデザインした通りに骨を削り、人工関節を取り付けます。

「難しい症例では、さらに正確を期すため、股関節には赤外線センサーで設置位置を確認できるナビゲーションシステムを、膝関節にはデザイン通り正確に骨を削れるロボットを用います。どちらの機器も高額で、国内にはまだ10～40台ほどしかないでしょう」(仁平医師)

こうして、一般の病院では2～3時間かかる手術を1時間未満に短縮。短時間なので、患者さんの体の負担が少なくてすみます。傷が小さく、きれいで、出血が少ないことも特徴。感染対策も徹底しており、多い日は1日8件もの手術を行うそうです。

術後に痛まない手術で医学界をリード

手術後に痛くならない手術にも力を入れています。

「一般の手術では、麻酔で眠っている間も、痛いという意識が脳に伝わっています。血圧上昇を抑える薬や麻薬をたくさん使うことになり、特に高齢の患者さんには体に負担がかかります。そこで、神経の伝達を遮断するブロック注射を打つ方法を考えました。痛い記憶が脳に残らず、血圧も安定。麻酔の薬や術後の合併症も減り、患者さんにとっていいこと尽くめです」(桑沢医師)

手術の名手としても知られる桑沢医師は、この方法を日本整形外科学会で発表。全国の専門医に指導を行っています。手術後も疼痛を管理するので、ほぼ痛みを感じることのない入院生活が可能です。

常に100%を目指し患者さんの満足を第一に

センターの根底にあるのは、「100人に1人の失敗も出してはならない。常に100%を目指す」という仁平医師の信念です。桑沢医師も言います。

「患者さんにとって2度目の手術はありません。誠心誠意を込めて、すべての患者さんに対して120%の力を出さなくてはならないのです」

仁平医師は、手術した患者さんを対象に、術後の生活についての講演会も毎年開催しています。

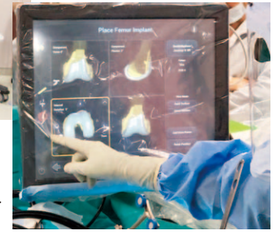
「コロナの影響でしばらくはお休みですが、毎回、300人近くの方が集まります。術後の不満が出ることを恐れてはできませんが、うちはみんな良くなるから、自信をもって開催できるのです」(仁平医師)

人工関節手術には、健康保険の高額療養費が適用されます。膝や股関節の痛みでお悩みの方は、ぜひ一度、外来においでください。

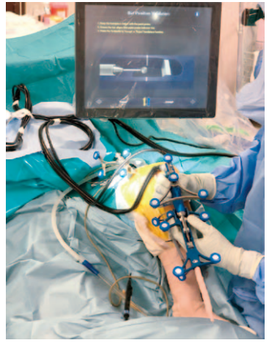
次号は、関節治療センターのもう一つの柱、再生医療を紹介します。

人工関節手術を支える支援ロボット

◀デザイン通りに正確に骨を削れる支援ロボット。



骨を削るロボットアーム▶



ロボット手術の設計図となる3D画像▶

やる気が出る。みんなで良くなる。
人工関節手術のリハビリ

埼玉協同病院では、人工関節手術を受けた患者さんが安心して元の生活に戻れるよう、リハビリにも力を入れています。その様子を専門スタッフに聞きました。

白根 淳　理学療法士　リハビリテーション技術科　副主任
木村 圭一　理学療法士　リハビリテーション技術科　主任

――リハビリの目的は何ですか？

木村：手術をすると、関節そのものは治りますが、関節を支える筋肉や周囲の軟部組織は以前のままです。新しい関節を守れるよう、運動して足の力を強くしていきます。

白根：床から立ち上がる、お風呂に入る、しゃがむ、外を歩く、自転車に乗るなど、その方が普段、自宅でどのような動作をしているかを手術前にお聞きします。そして、退院後にその動作が無理なくできるよう、その人に合ったリハビリをします。

――どんなことをするのですか？

白根：手術の翌日、ベッド上での軽い運動から始めます。起き上がり、車椅子に乗って移動することが最初の目標。歩行器で歩く、杖をついて歩く、杖なしで歩くという段階を踏み、階段の上り下りや、床からの立ち上がり、外歩きなどに進みます。

木村：入院期間は患者さんによって異なり、自宅で生活できるレベルになってから退院します。股関節は1～2週間、膝関節は2～3週間で退院される方が多いですね。

――心がけていることは？

木村：安心して動こうと思えるように、痛みや不安を取り除くこと。動画を撮って歩き方の変化を伝えたり、「こういう運動をするといいですよ」と病室であえて大きな声で伝えたりしています。周りの人も興味をもって、やる気の輪が広がるように。

白根：良いところ、できたところを伝えると、患者さんも嬉しいし、自信になりますよね。患者さん同士が親しくなって励まし合うのも、この病院の特徴。しっかり動けるようになるまで一緒に過ごすから仲良くなるんですね。先に手術した人が、後から来た人の相談に乗ったりして。今後は、部屋ごとの自主トレも取り入れようと思っています。

木村：一般の病院ではあまり見られない光景ですね。患者さんの満足度が高くなるよう、リハビリでも丁寧な医療を心がけています。

白根：ぜひ、我慢しないで早めに受診してほしいです。その後の人生を、「痛い人生」から「好きなことができる人生」に変えましょう！

患者さんの声

やっぱり、埼玉協同病院が一番。手術して本当によかったです。

鴻巣 郁子さん（80歳）　組合員

人工関節の手術って、本当に痛くないの？ こわくないの？ １年前に、膝の手術を受けた組合員の鴻巣郁子さんに、体験談をうかがいました。

手術したのは、ここなんです（写真）。たったこれだけ。きれいに治って、痛みも全然ありません。膝が痛いと言っているまわりの人たちも、皆さん私の足を見て、「あら、治るんだわ」って驚いていますよ。

私も以前は、膝が痛くて、痛くて。近所の整形外科でレントゲンを撮ったら「じん帯が悪い」と言われ、整骨院に10カ月ほど通い詰めても治らず、歩くのもつらかった。それでも、好きな観音様めぐりを途中であきらめるのが嫌で、足を引きずりながら西国三十三所を回りました。

あまりにつらくて、講演会や機関誌で知っていた仁平先生に診ていただくしかないと思い、外来を受診。すると、じん帯ではなく、骨の一部が壊死して、神経にさわっていることがわかりました。「人工関節に取り替えると痛みがなくなるよ」と言われ、迷わず手術を決めました。

入院期間は２週間ほど。手術は痛くも何ともなく、麻酔で眠っている間に終わりました。術後は病棟で過ごしましたが、痛み止めの薬が効いて痛くないし、膝がスムーズに曲がるので、杖をつかずにトイレに行って、看護師さんに注意されたほど（笑）。

リハビリの先生も看護師さんも、皆さん親切で明るいから、気分的にもすごく楽でした。病室の人たちとも仲良くなって、いまでも連絡を取り合っています。みんな良くなって、「よかったね」って言い合っています。

正座はできませんが、日常の不自由はないし、お風呂も毎日、湯船にゆっくり浸かっています。毎朝の日課は、自治会主催の公園でのラジオ体操と、6000歩くらいの散歩。公民館で週２回の卓球、月１回のウォーキングも楽しんでいます。落ち着いたら、お礼まいりを兼ねて、四国八十八カ所を巡礼するつもりです。

手術して、私は本当によかった。足が痛くてつらい方は、我慢しないで、ぜひ協同病院で診てもらうといいですよ。皆さんに、心からお勧めしたいです。

小児科 サポートいろいろ

日々、子育てに奮闘しておられるお母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃんその他多くの方々、本当にお疲れ様です。埼玉協同病院の小児科は育児サポートに力を入れています！今回は、当院での子育て支援の取り組みについて紹介させていただきます。

今年度より小児科公式LINEアカウント開設しました。

Check!

新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るう中、みなさん大変不安な日々を過ごされていると思います。「普段なら病院に行っていたけれど、今はすこし迷ってしまう。」「子どもたちとどうやって家で過ごしたらいいのか分からない。」などいろいろな不安や疑問があると思います。そんな中、当院の小児科医が中心となり「小児科公式LINEアカウント」が開設されました。アカウント内では、「吐いてしまっている」、「急に熱が出た」、など症状別の対応方法を、医師がわかりやすく説明してくれている動画が不定期で配信されていたり、子育て支援の方法が配信されています。この機会にぜひみなさん登録してみてください。

子育てわいわいサークル

「子育て中の組合員」がひとりぼっちで悩むことがないように、埼玉協同病院地区の「子育てグループ」として、みんなで支え合い、子どもが健やかに育つ地域を目指しています。

2008年から年に２回の『子育て教室』を開催しています。小児科医や保育士、栄養士の講義が聞けたり、月齢の近い親子での交流が持てる場として参加者のみなさんから好評をいただいています。

現在は新型コロナウイルスの影響もあり子育て教室などは開催出来ていませんが、それに変わるものとしてZoomを利用しての『巣ごもりカフェ』を企画・運営しています。家に居ながらにして、医師や保育士からアドバイスがもらえたり、親同士や医療スタッフと直接話ができます。時間は40分と短時間で設定しています。毎回、テーマは異なり不定期での開催となります。興味のある方はぜひ参加してみてください。先着順となります。開催日時のお知らせなどは小児科公式LINEでご確認ください。

地域で安心して子育てできるよう当院の小児科は産婦人科や地域とも連携し、スタッフも産科、小児科で継続して支援できる体制です。ぜひ、当院の妊娠・出産から育児まで切れ目ない支援でお手伝いさせてください。

新型コロナウイルス感染拡大の中、病院に行くのは不安かもしれませんが、子どもの健やかな成長発達にとって、健診や予防接種はとても重要です。必要な時期にきちんと受けることをおすすめします。徹底した感染対策の上、皆様をお待ちしています。

専門医シリーズ22 SERIES

平澤 薫
医師　小児科
科長、C3病棟医長

ドラえもんのように誰かが笑顔になれる手助けをしたい

子どもたちや親の成長を見守る小児科医。平澤薫医師は、病気だけでなく、子どもが育つ環境や心の奥にも細やかに目くばりし、インターネットやSNSでの情報発信も積極的に行っています。その原点は、あの漫画にありました。

プロフィール▶2000年、弘前大学医学部卒業。同年、埼玉協同病院入職。2004年、さいたま市立病院小児科研修。2005年より埼玉協同病院小児科。日本小児科学会専門医。日本プライマリ・ケア学会認定プライマリ・ケア認定医。日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医

漫画に救われていた苦悩の子ども時代

小児科は、赤ちゃんから、主に15歳の子どもまでを対象にしています。病棟は明るい雰囲気で、平澤医師も、優しさがにじみ出るようなお人柄。人をほっとさせる雰囲気をもつ、癒やし系のドクターです。

ふと胸のあたりに目を向けると、白衣の下に「ドラえもん」のTシャツが透けて見えます。子どもたちを喜ばせるためでしょうか？

「それもありますが、僕が大好きなんです。幼稚園の頃からドラえもんが大好きで、作者の藤子・F・不二雄先生の大ファンでした。真似をして、祖父のベレー帽を頭に乗っけて漫画を描いていたくらい」

なんと、子ども時代の夢は「漫画家になること」だったそうです。

「あだ名は“ドラちゃん”。でも、僕自身は“のび太”みたいな感じで、ずっといじめられっ子でした。運動もあまりできないし、友達をつくろうとがんばってもうまくいかない。自分を表現できなくて、暗い人間だと思い込んでいました。そういう毎日の中で、漫画に癒やされていたんです」

漫画家になりたかったのは、漫画が、夢や希望を与えてくれるから。ドラえもんは、子どもの頃からずっと平澤医師のそばにいて、励ましてくれる存在だったのです。

いじめられっ子だったから弱い人の気持ちがわかる

「だから僕も、自分がしてもらったことを、誰かにしてあげたい。自分が関わることで誰かが笑顔になったり、その人の人生の一部分でも明るく彩られたりするような手助けがしたい。そう思うようになりました」

中学３年生のとき、筋肉隆々の天才外科医が活躍する『スーパードクターK』という漫画を読んで衝撃を受け、将来の夢が医師へと変わります。

「スーパードクターになるために筋トレを始めて体を鍛え、医学部に入学。奨学金を得るために埼玉協同病院で話を聞き、すぐに奨学生になることを決めました。この病院は、弱い人の立場になって、弱者を守る姿勢を貫いていますよね。僕も、弱い人の気持ちがわかるから、とても共感できるんです」

子どもは、未来への希望の塊育つ環境を丸ごと見守る

こうして、漫画のかわりに医療で人を癒す道に進んだ平澤医師は、外科ではなく、小児科を選びました。

「子どもは、未来への希望の塊のようなものだから、子どもたちの未来を守るような仕事がしたいと思ったんですね。もちろん、子どもが好きだったことも大きな理由です」

入職して20年。これまでに、たくさんの子どもたちとお父さん、お母さんたちを見守ってきました。

「子どもに限らず、どんな人が来ても診ることのできる懐の深い医者になりたくて、１年間は内科医として働いたこともあります。ここで生まれた子の中には、大きくなって医学部に入り、埼玉協同病院の奨学生になっている子もいるんです。もうすぐ一緒に働けると思うと楽しみですね」

小児科医は、病気だけを診るわけではないと平澤医師は言います。とくに近年は、子育ての大変さとともに、子どもの貧困や虐待なども社会問題になっており見過ごすことができません。

「子どもを支える親や生活環境、社会背景、親との関係など、家庭を見ていかなければ子どもを救えません。子どもの病気で受診したり、健診のときなどに親の表情がすぐれなかったり、子育てのつらさを感じたりすると、注意して話を聞いたり、看護師など他職種のスタッフにつないで共有するようにしています」

思い詰めたような表情で外来を受診し、声をかけると涙ぐんだり、堰を切ったように泣き出す親御さんもいるそうです。問題に気づき、手を差し伸べるための“入り口”の役割を果たすのも小児科医の役目だと言います。

「子育てカフェ」や「巣ごもりカフェ」救いになる場をつくりたい

「一緒に取り組む仲間をつくったりすることができれば、子育ての救いになるのではないか」という思いから、平澤医師は、さまざまな取り組みをしています。

その一つが、「子育てカフェ」。時間と場所を設けて、子育ての不安や悩みを親同士で話し合ったり、医療スタッフに質問したりできるようにしたのです。コロナの影響で開催が難しくなってからは、オンラインでの「巣ごもりカフェ」にスタイルを変更。また、動画配信サービスや、SNSのLINEを使って、子育てに役立つ情報発信も積極的に行っています。

「がんばっているお母さんやお父さんたちにとって、１本の細いワラでもいいから、つかむものができればいいなと思って。この病院では、スタッフみんなが、子どもを取り巻く家庭が明るくなるように、笑顔になるようにという共通の思いを持っています。だから、いろいろなアイデアを提案しやすいんです」

悩んでいる親御さんたちに、「子どもはだいたい元気に育つので大丈夫ですよ、と言ってあげたい」と話す平澤医師。今では自身が、子育てをがんばる人たちにとっての「ドラえもん」のような存在になっているのかもしれません。

第４回埼玉協同病院建設委員会総会

建設委員会事務局

7月25日(土)に『第４回埼玉協同病院建設委員会総会』を開催しました。

職員37名(埼玉協同病院34名、法人内事業所３名)、組合員27名の総勢64名の参加でした。

コロナウイルス感染拡大の影響をもあり、前回１月の総会から６ケ月ぶりの開催となりました。

現時点での基本設計が紹介されました。感染対策の視点では、分院外来には一般・小児共に隔離専用入口が設けられ、一般の患者との動線が分けられています。感染症の流行により患者数が増加した際には、一部スタッフエリアを封鎖し、感染患者の待合室とする工夫も施されています。本院病棟では、陰圧装置が設置された病室は、エレベーターをおりると、他の病室の前を通ることなく入室できるような配置となっています。

コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2021年３月着工予定が８月以降に延期となりました。

総会での組合員さんからの質問(抜粋)を紹介します。

Q 現在駐輪場が少なく停められない時もあります。自転車置き場とバイク置場が確保されますか。

A 自転車とバイクの置場は別に設置しました。駐車台数は現在の2倍に増えます。

Q 東浦和バス便はどこに発着するのですか。

A 行政と交渉中ではありますが、分院から本院に順番に回るルートを考えています。

こちらHPHです!

※ HPHは、健康増進を患者さま・地域・病院職員ですすめていく WHO（世界保健機構）が推奨する国際的な病院ネットワークです。

組合員の皆様から、ご支援をいただきました！

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、全国で感染対策用具の不足に見舞われ、当院も例外ではありませんでした。

組合員さんより、キッチンペーパーを利用した使い捨てマスクを寄付していただき、どうしてもマスクが買えずに持参できなかった方に配布しました。

また、職員用には不織維布を使用したマスク、手作りのアームカバーやフットカバーなど、内視鏡室をはじめ、各部署で利用しています。

がんばっている職員を元気づけたいと、可愛い手作り小物を寄付していただきました。ペン立てや眼鏡入れに利用させていただいています。

この間、医療者従事者への励ましのお言葉やご支援をいただき、支えられていることを実感しております。

組合員さん、地域のみなさんのご期待に応えられるよう、職員一同、力を合わせて行きたいと思います。引き続きよろしくお願い致します。

病院を支える仕事と人
事務系 職場紹介……外来医事課

▶ **どんな部署ですか？**

外来医事課は患者様に見える仕事として診療科の受付業務、検査の予約等の案内を医師・看護師と連携して行っています。その他患者様に見えない仕事が多くあり、その一つとして診療科の運営をより良いものにしていくため、月に一度医師・看護師・事務で会議を開催しています。会議の中での事務の役割は医師・看護師から課題等を抽出し改善へと繋げていくことです。また、診療科で新しい治療を開始する際には地域連携課と連携し、開業医の先生方へと情報を発信しています。

一つの部門では出来ることは限られるかもしれませんが、事務総合職として他部門と連携し業務を行っています。

▶ **どんなことを大事にしていますか？**

事務総合職として様々なことをマネジメントすることが重要であると考えています。特に外来事務という視点で見たときに、診療科の質(患者様に提供する医療内容・情報、待ち時間、患者満足度)を向上させることが大切な役割だと思います。現在は病院を利用する方はインターネット等で調べた上で受診される方が多いため、質の向上は常に問題意識を持って取り組んでいます。

また、病院の経営を支えるという視点では、診療科の事務から医師に予約数の相談や、前月の経営状況を診療科の会議で医師・看護師に伝え経営改善に共に取り組んでいます。

組合員さんへのメッセージ

病院では月に一度保険証の確認を総合受付で行っています。また、保険証が変わった際は、お手数ですが総合受付でご提示いただくようお願いします。

たまねぎベービーといっしょに
ストレスたまっていませんか？

新型コロナウイルス感染症拡大により、突然やってきた自粛生活。まだまだ不安な日々が続いていると思います。休校の分、学習量やスピードに変化があり、行事や遊びにも制限のある子どもたち、多くのストレスを感じていることと思います。ストレスは体の症状(頭痛・不眠・腹痛など)や行動の変化(落ち着きがない・よくしゃべる・よく泣く・わがままになる・言動が幼いなど)などに表れます。小さな変化も気にかけてあげましょう。そして、大人だってストレスはたまります。上手にストレス発散しながらこの困難を乗り切っていきたいですね。

親子で上手にストレス発散10ヶ条

①日常の維持を大切にしよう！(早寝早起き、3食、生活にメリハリを)

②映像やニュースを見過ぎない！(正確な情報を賢くキャッチ)

③一緒に約束を考えよう！(留守番・遊び・感染予防の約束事)

④一緒に予定を立てよう！(お手伝いや献立、楽しみ方)

⑤親子でできるアクティビティーを取り入れよう！(歌う・踊る・体操・室内遊びの工夫)

⑥外に出て、身近な自然に触れてみよう！(思わぬ発見が心のリフレッシュ)

⑦子どもの気持ちをよく聴こう！　自分のこともしっかり話そう！

⑧時には手の込んだ料理、時にはレンチンやテイクアウト！(家事も『手抜き』時々『きっちり』で)

⑨自分の時間も大切に、リラックス法を見つけてみよう！(体を動かす、何かに没頭してみる)

⑩相談先をみつけよう！(家族や友人・専門家)・つながりを維持しよう！(オンラインも上手に活用)

まずは立ち止まって深呼吸を大切に！
困ったり、不安な時は、私たち医療スタッフにもご相談ください！